

ウメ輪紋ウイルス (PPV) 発生圃場における有翅アブラムシ類の飛来動向 (2011 年)

加藤綾奈・星 秀男・小野 剛・野地喜徳*・小谷野伸二
(生産環境科・*農振事)

【要 約】 ウメ圃場に飛来する有翅アブラムシ類は、年次により時期や動向が多少異なるが、4月から6月、8月から9月および10月下旬から12月上旬の年3回の増加期がある。また、散発的ながら、1月から3月の低温期にも飛来が認められる。

【目 的】

ウメ輪紋ウイルス (PPV) の拡散防止には、有翅アブラムシ類の動態に基づく防除対策の構築が必要である。そこで、ウメ圃場における周年を通じた有翅虫の飛来状況を調査し、PPV 防除対策上の基礎的な知見とする。

【方 法】

2011年1～12月に、青梅市内のPPV発生4圃場(青梅市A～D)と、PPV未発生園の農総研立川および青梅内の計6ヵ所のウメ圃場に黄色粘着板(ホリバー)を行灯型に4枚設置した。粘着板は毎週2日間設置し、誘殺された有翅アブラムシ類の頭数を計測した。

【成果の概要】

1. 各圃場における誘殺消長：1～3月においては、調査6圃場中5圃場で、単発的ながら平均1.8頭の誘殺が認められ、冬季から早春季にもアブラムシ類が飛来していることが明らかとなった。各圃場ともに、4月中旬から誘殺数が急激に上昇し、青梅市A～Dおよび農総研立川では、6月中は誘殺数の高い状態が継続し、最高193～490頭であった。なお、農総研青梅では、6月15日に10600頭が誘殺されているが、この前後の誘殺種はほとんどが粘着板設置場所付近に植栽されているケヤキに発生したケヤキヒゲマダラアブラムシであり、他の5圃場とは発生様相がやや異なる。その後、7月下旬～9月上旬にかけて上昇傾向であったが、それ以降、10月上旬にかけては急激な低下を示した。11～12月にかけては、青梅市B、C、Dおよび農総研立川で再度誘殺数の増加が認められたが、青梅市Aおよび農総研青梅ではほぼ横ばいに推移し、秋冬季の飛来状況は圃場により異なった(図1)。
2. 昨年との動向比較：各圃場における、5月以降8月までと、10月下旬以降の誘殺動向は、2010年とほぼ同様の傾向を示しているが、本年は4～6月にかけての増減のピークが7日～28日早かった。夏秋季の動向は両年で異なり、昨年は8～9月にかけて2回目の増加期が認められたが、本年は9月に入り誘殺数が急激に低下した(図1)。
3. まとめ：今回、年間を通じた有翅アブラムシ類の動向が初めて調査され、ウメ園における飛来は、4～6月、8～9月および10月下旬～12月上旬の年3回の増加期があることが明らかとなった。増減の動向は、年次により異なるため、本調査を継続し、データの集積を図ることが重要である。また、1～3月における有翅虫の飛来は初めての知見であるが、この時期はウメの開花期に相当する。PPV感染樹の花弁はウイルス濃度が高いことが確認されており、冬春季の動向についても引き続き注視する必要がある。

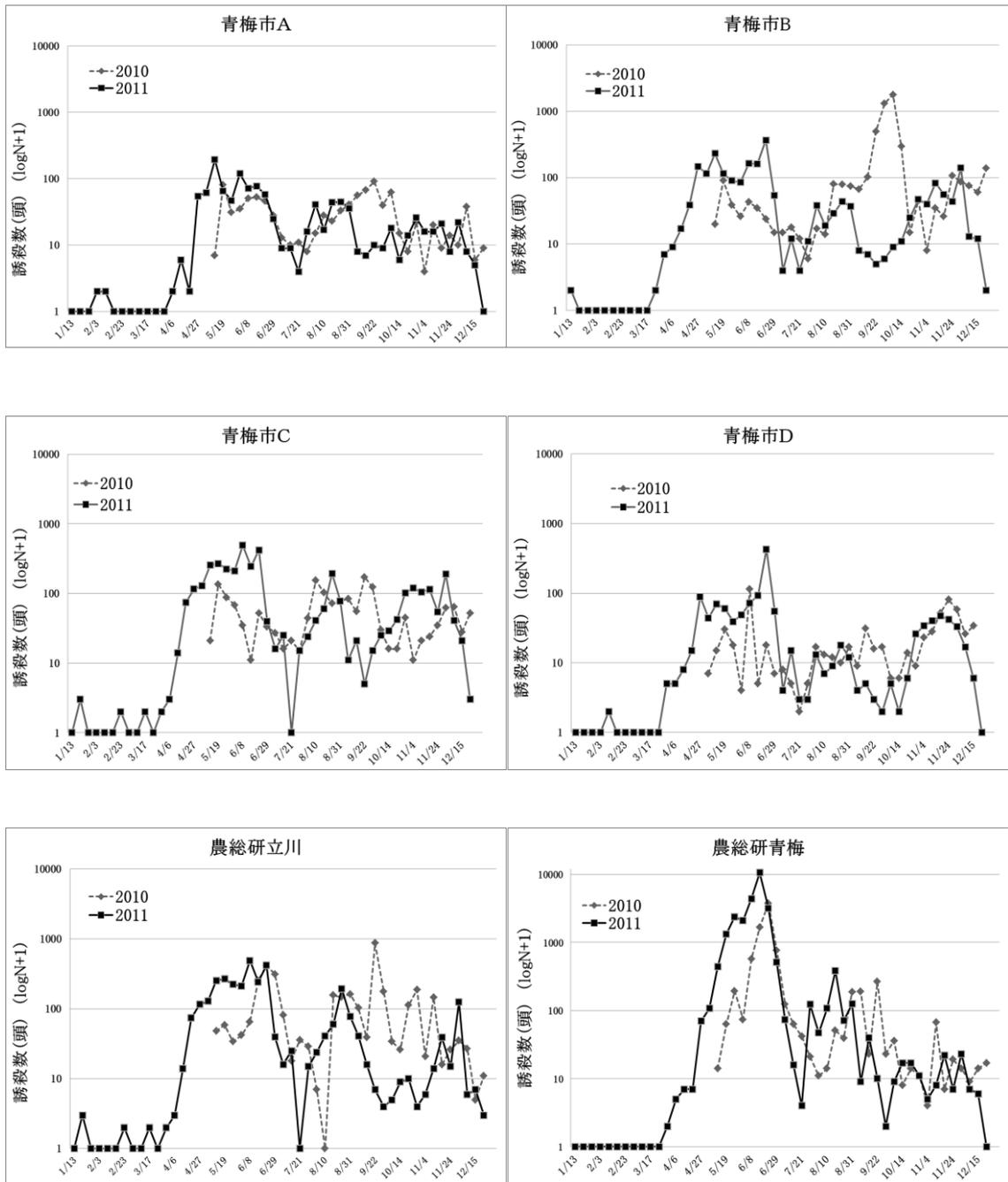


図1 各ウメ園場における有翅アブラムシ類の誘殺消長
(誘殺数は粘着版4枚の合計数)